



創立一〇〇周年によせて

林野庁長官 加藤 鐵 夫

伝統ある木曾山林高等学校が創立一〇〇周年を迎えるに当たり、心からお慶び申し上げます。

木曾山林高等学校は、一九〇一年（明治三四）四月に生徒六十七人で開校以来、二〇世紀のまさに一〇〇年間、林業を専門とする学校として運営され、林業界等に卒業生を輩出し、我が国の森林・林業の発展に貢献されておりますことに対し、心から敬意を表する次第であります。

さて、この一〇〇余年の林政を振り返ってみますと、社会の急速な近代化を目指した明治政府は、林業に関しても意欲的な姿勢を示し、それまでの不明確であった山林の所有区分を行い、一八九七年（明治三〇）に森林法、一八九九年（明治三二）に国有林野法を制定するなど、国土の保全と森林資源の維持培養に力を入れました。

大正、昭和に入り、日本の林業はほぼ順調に推移しましたが、太平洋戦争の勃発により、戦争中は軍需資材の供給、戦後は被災都市の再建に大量の木材が消費されたため森林は疲弊しました。しかしながら、一九五〇年から始まった全国植樹祭などの国民的な緑化運動等を通じ、精神的な復旧造林や拡大造林が進められ、森林荒廃の危機を免れることができました。

一九六〇年代に入ると、高度経済成長に伴い木材需要が急増し、木材供給力の拡大が強く求められてきました。このような状況に対処するため林業生産力の強化と林業従事者の地位の向上を目指して、一九六四年（昭和三九）に林業基本法が制定されました。一九七五年以降になると公害の発生などに反比例して、豊かな水や美しい緑など生活環境の保全や自然環境保全の重要性が改めて認識されるようになってきました。

最近では、地球温暖化防止に果たす森林の役割が注目されるなど、森林の維持管理の重要性についての認識が一段と深まり、森林に対する国民の要請はますます多様化・高度化してきています。

このような中、先の通常国会におきまして、新しい「森林・林業基本法」が成立しました。この法律は、森林に対する国民の要請の変化や林業をめぐる厳しい情勢に対応すべく、ほぼ四〇年ぶりに林業基本法を抜本的に見直し、国家社会における森林・林業の位置づけを明確にするとともに、新たな理念の下に、施策の基本方向を明らかにしたものです。

今後は、この新たな基本法の下で、これまでの木材生産の量的拡大を中心とした政策から、森林の多面的機能を持続的に発揮させる森林経営を基本とする政策へと転換することにより、森林・林業・木材産業の全般にわたり積極的に林政を展開して参る所存であります。

二十一世紀の自然との共生、循環型社会においては森林、木材がより重要になると信じて疑いません。この実現を図るためには、それぞれの地域において森林所有者、林業従事者、木材産業事業者はもとより、広く国民全体の理解と取り組みが不可欠であります。貴校におかれましては、例年、代々木公園で開催します「森林の市」に積極的に参加いただいておりますことも、都市住民が森林・林業をどのように感じているかを知り得るすばらしい取り組みと高く評価しております。

今後におきましても、貴校が地域と一体となった活動やインテリア部門との連携など特色ある教育を通じて、我が国の森林・林業・木材産業の発展に貢献されることを期待して、お祝いとさせていただきます。

平成十三年七月二十五日



『一〇〇周年記念誌』の発刊を祝す

記念事業実行委員長
蘇門会長

村井定男

母校創立一〇〇周年記念事業の一つである記念誌『山霊生英傑』が、刊行の運びとなりましたこと、誠に喜ばしくお祝い申し上げます。

また巻頭に林野庁長官加藤鐵夫氏からのご祝辞を賜りましたこと、誠に光栄なことと厚くお礼申し上げます。

思えば平成九年二月、第一回編集会議以来、五年の歳月を経て、ようやく発刊の日を迎えました。この事業にご尽力いただいた古川彦次編集委員長はじめ委員各位、学校当局、また資料提供をされた多数の蘇門会員の皆様、さらに学外からご協力いただいた多くの関係各位に深甚なる謝意を申し上げます。

さて「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」とは、三国志の英雄、魏の曹操の後を受け継いだ文帝曹丕の名言であります。母校の一世紀をこうした『記念誌』として、文章にまとめられたことは、まさに本校教育の「大業、不朽の盛事」であります。否、母校のみにとどまらず、広くわが国の林業・インテリア教育にとりましても「大業、不朽の盛事」と自負するものであります。

なぜならば、明治三四年、わが国初の林業を専門とする実業学校として誕生した母校は、文字通り日本
本の林業・インテリア教育を常にリードし、木曾の山霊に育まれた多くの英傑を世に送りだしたからであります。

そして、その教育を一環して貫いたものは「山を愛す」の精神であります。環境破壊とくに森林破壊が世界的な問題となり、人類存亡の危機を迎えようとしている今日、今ほど「山を愛す」の精神が求められている時はありません。

本誌は、これらを踏まえ新しい世紀における母校の使命を明らかにし、益々の発展を期すものであります。

こうしてみますと、今から一〇〇年前、母校創設に携わった先人のご労苦にも思いを致すのであります。貧しい中から浄財を出し合い創設に尽力された木曾郡民の皆さん、ドイツ林学をもとに学校づくりに情熱を傾けられた初代校長松田力熊先生はじめ諸先生方、郡内はじめ遠く全国各地から集まった先輩諸氏等々。これらの中には、すでに鬼籍に入られた方も多くおり、改めてそれらの御霊に母校一〇〇周年をご報告し、益々の隆盛を誓うものであります。

蘇門会員の皆様には、本誌が生涯座右の書として、そして皆様の青春回顧とともに明日への活力となるよう、ご愛読賜うことを願っております。

さらに、母校で今まさに森林・林業、インテリアを学ばれている生徒の皆さんには、本誌が皆さんの未来を指し示すもの、人生の応援歌たらんことを願ってやみません。



ご挨拶

記念誌編集委員長 古川彦次

昭和三八年（一九六三）秋、校舎全面改築工事の完成を待つて創立六〇周年記念式典が挙行された。この大事業の記念碑を建立するにあたり、蘇門会長中村治郎（16回）は、「山を愛す」の四字を揮毫し自然石に刻んで前庭に据えた。「山を愛す」は開校以来本校教育の根底を流れる思想である。

明治の初期、政府は「東京山林学校」を創立してわが国初の林業教育を始めた。明治一五年（一八八二）のことである。この学校は四年後東京農林学校となり、明治二三年に東京帝国大学農科大学となった。同じ頃、「木曾に山林学校を設立すべし」との声もあったという。

奇しくも二〇世紀の幕開けとなった明治三四年、郡民の熱意によって生まれた本校は「木曾山林学校」の名称を高らかに掲げ、開校当初からわが国林業振興のため広く人材を集める学校として名を馳せた。

一〇〇年前、山林学校を目指した先輩はこの学校にどんな想いを託して木曾路を踏んだのであろうか。遠く島根県から凡そ一ヶ月を費やしてこの学校に辿り着いた……、と聞けば、きょう笈を負うた明治の少年の気概に打たれるばかりである。

初代松田力熊校長、手塚長十首席教諭の両先生を柱に、ドイツの林学を核にして始まった「林業之教育」は、まさに斯界の先駆者であった。そして二代江畑猷之允校長が「……教師も生徒も心を注ぎ、神を凝し、習を積み、精を究め、異常な努力を惜しまなかった……」と述べられた草創期の教育は、そのまま本校の伝統になった。

明治―大正―昭和―平成にわたる一世紀の間に、学科が増え校舎も幾度か衣を替えた。しかし、師弟

一体となつた実践躬行の教育は変わることなく受け継がれて、八千有余人の卒業生を世におくり、輝かしい名声を博してきたことは天下の認めるところである。さらに申せば「木曾山林」の校名は勿論、ヒノキの葉をあしらつた「校旗」「校章」、雲井にそびゆる……の「校歌」も激動の世紀の中を守り継がれた。その姿は誇りて余りあるものといえる。蘇門に学んだ人々の秀でて母校を愛した証である。

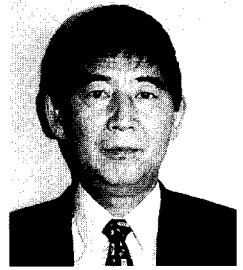
この度記念誌編集に手を染めてみて、本校一〇〇年の歴史はまことに重く大きかつた。すぐれた教育を慕つて年々歳々ここに集い、若き日を過ごした卒業生の果てしなく広がる足跡と、すでに幽明界を異にする多くのことに、その作業は容易ではなかつた。あれこれと原稿を書き進めるにつれて、母校の名誉を担つて活躍され、既に今は亡き多くの方々をはじめとした「声なき声」が、うねりのように湧きあがつて来る不思議な心地を覚えることがしばしばあつた。

「すべてのものは過ぎ去りつつある。その中であつて多少なりとも『まこと』を残すものこそ、真に過ぎ去るものと言ふべきである。」藤村先生のこの言葉を思い、一〇〇年の道をたどつた。幸い、単身ドイツ林学発祥の地を訪ねて貴重な取材まで行つた手塚好幸教諭をはじめ、優れた委員の努力によつて不断の作業が進み、数多の発掘や展開ができたことは大きな感動であり喜びであつた。

またこの間に、多くの卒業生から貴重な資料や体験談など多大のご協力を賜り、常に蘇門の力と激励を背にうけて、ここに到達できたものと認識している。

「過去を深くふりかえれば未来の展望が遠くまで開く」と聞く。この記念誌が二十一世紀の礎石となれば、冥利につきるものである。

ここに謹んで関係各位に深甚の謝意を申し上げます。



『百周年記念誌』 発刊によせて

学校長 橋 詰 政 勝

明治三十三年、先覚の方々の教育に対する熱意と郡民の意向を汲んだ郡会は、実業学校令に基づく各種程度の山林学校設立を決議しました。翌三十四年、わが国で初めて林業を専門とする実業学校として、郡立乙種木曾山林学校が設立されました。こうして本校が誕生したのです。

同年七月甲種に昇格し、三十九年に県立移管、大正元年には新開地区に新校舎を竣工して移転し、現在に至っています。

初代校長の松田力熊先生を中心に、森林を科学的にとらえ、森林の再生とその持続性を追究したドイツ林学を原点としながら、しっかりと人間性を養うことにも意が注がれました。そのために実習や実地教育により、本校の「実地に結びついた学習」「純朴で確固たる意志」の伝統が生まれました。

日本の林業を背負って立つ自負をもって開校されて以来、地元ばかりでなく、全国各地から多くの若者が本校に学び、今日までに卒業生八千有余を数え、御料局、営林署等の官界はもとより地元各界、全国各地で活躍されておられます。このことは、誠にご同慶にたえないところであります。

さて、記念誌中の「一〇〇年の歩み」は、明治より今日までの本校を、数多くの資料を通じ、さらにそれぞれの時代に学んだ人々の青春の証言や記録等によって綴ったものです。しかし本書は本校百年の歴史であると同時に、本県における林業及び林業教育の歩みであるというだけでなく、日本のそれであるといっても過言ではないと考えています。

本誌を繙くとき、木曾の山中の小さな学校で、地元木曾の方々が熱い期待をもって見守る中、そこに学ぶ若者と教師たちの、その時々熱いドラマが見えてまいります。そして、ありし日の学窓の思い出

につながる懐旧の書として、生きる力を与えてくれる書となることと思います。

最近の科学技術の発展により、産業構造、社会構造、環境等に大きな変革が現れ、わが地球の自然破壊がますます進む中で、これからの地球を自然豊かな住みよい所にして行かなければなりません。

山林で学んだ同窓生には「山を愛す」心が培われています。「山を愛す」心には、単に自然、森林だけでなく、人類の営み等を含み、これからの自然のあり方、生き方を本誌の中に見つけることができるかと確信しています。

最後に、本誌の刊行にあたって、百年に及ぶ歳月の流れの中、資料の散逸など、非常に困難な状況下で貴重な資料を提供してくださいました各位、日夜、熱意をもって執筆、編集に携わられた編集委員各位、さらにご協力いただいた先輩諸賢、蘇門生、教職員各位に対しまして、心から敬意を表わすとともに、感謝を申し上げます。



一〇〇周年と記念誌の発行を祝う

PTA会長 小林 登

輝かしい二十一世紀の幕開けに、創立一〇〇周年の記念式典を迎えましたことを、関係各位と共に心からお慶び申し上げます。

創立一〇〇周年とは偉業というべき大賀であり、また重大かつ誠に意義深きことであります。このことを悟りますときに、副実行委員長として重責を汚し、なお記念誌発刊に当たりご挨拶する機会を与えられ、この上なき光栄に存じます。

PTA会員一同と共に、この祝賀に向けて微力ながらご協力を申し上げます、共々ご同慶の至りでございます。

一〇〇年の歳月は人間の営みに例えれば、四世代の長きにわたるもので、現代のような世の変遷においては、語り継ぐことさえ難しく、やもすると埋もれ去ってしまうのが世の常であります。このような世情の中で、本校の創立時に掲げられた「実学主義として単に知識・技能を修めるのみでなく、健全なる精神を向上させ、しっかりとした人間性を養う」とする大きな教育目標は、幾星霜の移ろいの中においても脈々と受け継がれ、その間、多くの人材を広く社会に輩出して参りました。このことは、本校にとりまして偉大な財産であり、誇りとするところであります。

現在におきましても、その教育方針は一貫として変わることなく、関係当局の厚いご理解とご配慮を賜り、充実した環境や施設の中で熱心なるご指導を戴いていることに対し誠に有難く感謝申し上げます。生徒には、先人達が長い年月を経て残してきた規範や業績を励みに、一人ひとりが資質を伸ばし、社会性を身につけ、自ら率先して目的を達成できるように研鑽を積むことを望みます。

PTAとしましても「会員相互の親睦と教養の向上」等をはかり、子供らの道筋を照らし続けることを責務とし、そのための努力が必要であることを痛感しているところであります。

県当局はじめ関係各位には、今後一層のご指導・ご鞭撻のほどを切にお願い申し上げます。次第でございます。

さて、記念誌の発刊において、遙か創立時にさかのぼり、現在に至るまで、古川彦次先生を委員長とする編集委員各位には数年前より作業のお骨折りを戴き、一〇〇年の重きに値する本誌が立派に刊行されましたこと、そのご労苦に感謝を申し上げます。

本誌は単なる学校誌でなく、卒業生であります蘇門会の諸先輩方が全国津々浦々においてご活躍され、それぞれの社会発展及び地域発展のために貢献された意気込みが伝えられ、後に続く後輩達の礎となる大切な資料になることと思います。

一〇〇周年の記念誌が刊行されるに当たり、創立時に並々ならぬ意志と熱意で「百年の計」を立てられました地域の先人達を偲ぶと共に、関係機関・地域の皆さん・歴代の先生方・また「蘇門会」並びにPTAの先輩各位に改めて深く敬意と感謝を捧げるものであります。

終わりに、執筆・編集に当たられた皆さんに衷心より厚く御礼を申し上げます。



百周年を迎えて

生徒会長 起 元 樹

本校が、百周年を迎えるこの記念すべき歴史的な年に、私が全校生徒の代表として、生徒会をやらせていただけることを、大変うれしく、そしてとても誇りに思います。

百年という時間は、とても長く、壮大なものです。そんな時間の中で、私たちが今、本校の在校生として百周年を迎えることができることは、一つの奇跡ではないかと私は感じています。

私は、新入生として本校に入学した頃は、まだ百周年が間近に迫っていることなど、全然知りませんでした。私が、そのことを知ったのは二年生の時、ひのき祭副実行委員長として準備をしている最中でした。生徒会主任の先生から、「来年は、この学校の百周年の年だから、その時三年生のお前らには、今までにない大きなことをやることのできるチャンスなのだ」と言われたことを今でもよく覚えています。

そして、私が生徒会長になったときの選挙の立会演説会には、百周年を意識した生徒会活動を行っていきたくて公約にも掲げました。

実は、本校の生徒会では、二年ほど前から、先輩方が本校百周年に関連した企画を、ひのき祭のメイン企画として、行ってきました。

一昨年は、「未来にエールを、山林高校青春白書」と題して、本校のイメージを少しでも良くしようと、地域住民の方々からの声を集め、また交流を深めました。さらに、郡内の中学校の生徒にも、山林の良さをわかってもらおうと、アピールをしました。

昨年にはいたっては、百周年の記念式典のときに飾ってもらえるような、何か思い出に残る「物」を作

ろうというコンセプトのもと、「全校制作のはり絵」を行いました。各学年ごとに分かれて、「寝覚ノ床」「御嶽山」「御興まくり」の三つのすばらしい作品を残してくれました。

そして今年、いよいよ百周年を迎えた年です。今年の生徒会執行部の目標は「挑戦」そして、全校での取り組みは「ビューティフル山林」です。私たち山林生は、今年一年、どんなことにも挑戦し、美しい山林で百周年を飾れるよう。先輩の残してくれた大きな財産を手にも、この百周年の歴史の中に新たな歴史を残せるよう、全校一丸となって、がんばっていききたいと思っています。

凡 例

- 1、本校職員及び卒業生の敬称は原則として省略した。ただし職員については校長・教諭などの職名を付し、卒業生については、卒業回数を付してできるだけわかるように努めた。
- 2、本校関係以外の方は敬称を付したが、既に亡くなられている方の敬称は原則として省略した。
- 3、旧字体の漢字は原則として新字体に改めた。
- 4、資料等における旧かなづかい（歴史のかなづかい）はそのままとした。
- 5、年号は、明治・大正・昭和・平成の元号を用い、必要に応じ、西暦を用いたり、（ ）内に示した。
- 6、写真及び資料掲載の場合は、その所有者や提供者の名前をできるだけ添えた。また複数の提供者がある場合は、代表一人をあげ、他と付した。
- 7、直接取材等による記事の場合は、その後に（付記）としてご協力いただいた方々の名前を載せた。
- 8、写真やコピー資料は、それぞれ「写」、図や表の場合は「図」のように略記し、さらに資料番号をつけて各資料に付した。

目次

口絵

創立一〇〇周年によせて

林野庁長官

加藤 鐵夫

『一〇〇周年記念誌』の発刊を祝す

記念事業実行委員長・蘇門会長

村井 定男

ご挨拶

記念誌編集委員長

古川 彦次

『百周年記念誌』発刊によせて

学校長

橋詰 政勝

一〇〇周年と記念誌の発行を祝う

P T A 会長

小林 登

百周年を迎えて

生徒会長

起 元樹

凡例

第一部 山林一〇〇年の歩み

序章 人類の誕生と環境問題

はじめに

3

第一節 人類と母なる森林

5

第二節 森林の破壊から再生へ

8

第三節 世界に展開する林学・林業教育と本校

20

第一章 わが国の森林・林業の歴史と教育

はじめに

33

第一節 わが国の森林・林業

35

第二節	夜明けを告げる二つの学校	44
-----	--------------	----

第二章	木曾山林学校の誕生と草創期	55
-----	---------------	----

はじめに

第一節	山林学校創設への胎動	57
第二節	わが国初の林業専門の実業学校開校	64
第三節	草創期の本校	68
第四節	校友会と『校友会報』の発刊	102
第五節	県立移管と校舎移転新築	112
第六節	草創期の生徒の特徴とその活躍	115
第七節	明治期の校長と職員	126

第三章	木曾山林学校教育の確立と発展	133
-----	----------------	-----

はじめに

第一節	日露戦争後の社会と林業政策	135
第二節	新設校舎の落成と教育の充実	147
第三節	学校生活と行事	161
第四節	『岐蘇林友』と林業の啓蒙活動	168
第五節	卒業生の進路と活躍	172
第六節	蘇門会の発足と発展	180
第七節	大正期の校長と職員	182

第四章 不況と戦時下の苦境を乗り越えて……………185

はじめに

第一節 世界恐慌と第二次世界大戦……………187

第二節 苦境と新たな活動……………191

第三節 活躍する校友会……………206

第四節 蘇門会の発展……………210

第五節 戦時体制下の教育活動……………224

第六節 このころの先生方……………259

第五章 新憲法と木曾山林高校の発足……………263

はじめに

第一節 戦後の混乱の中から……………265

第二節 新制「長野県木曾山林高等学校」の発足……………290

第三節 PTAの発足と活動……………322

第四節 寄宿舎生活と生徒の出身地……………324

第五節 蘇門会再建そして活性化へ……………332

第六節 教員組合の結成……………338

第七節 校内の施設・設備……………339

第八節 この頃の生徒と職員……………346

第六章 経済成長と新制高校の発展……………351

はじめに

第一節 教育を取り巻く諸情勢……………353

第二節	校舎の全面改築と六〇周年記念事業	359
第三節	教育体制の改革とコース制の設置	377
第四節	生徒の活躍	388
第五節	このころの校長と職員	423
第七章	林業の停滞と過疎化の中で	431
はじめに		
第一節	本校を取り巻く社会情勢	433
第二節	本校の改革と教育実践	442
第三節	生徒の活躍	454
第四節	このころの寮生活	472
第五節	記念行事と施設設備の充実	475
第六節	活発なPTA活動	485
第七節	進路指導の変化	489
第八章	新たなる教育の創造をめざして	491
はじめに		
第一節	世界の動きを見つめて	493
第二節	本校の将来像検討	502
第三節	本校の新たな改革	507
第四節	生徒たちの活躍	517
第五節	生徒会の活性化と活躍	540
第六節	充実する母校	566

第七節 二十一世紀 世界の山林へ……………578

部門・資料編

第二部 思い出の記

第三部 山林に学んだ仲間たち

一〇〇周年記念誌ができるまで……………921

あとがき……………928